



3:9 では、どうなのでしょう。私たちは他の者にまさっているのでしょうか。決してそうではありません。私たちは前に、ユダヤ人もギリシヤ人も、すべての人が罪の下にあると責めたのです。

3:10 それは、次のように書いてあるとおりです。「義人はいない。ひとりもない。」

3:11 悟りのある人はいない。神を求める人はいない。

3:12 すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもない。」

3:13 「彼らののでは、開いた墓であり、彼らはその舌で欺く。」「彼らのくちびるの下には、まむしの毒があり、」

3:14 「彼らの口は、のろいと苦さで満ちている。」

3:15 「彼らの足は血を流すのに速く、

3:16 彼らの道には破壊と悲惨がある。

3:17 また、彼らは平和の道を知らない。」

3:18 「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」

3:19 さて、私たちは、律法の言うことはみな、律法の下にある人々に対して言われていることを知っています。それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。

3:20 なぜなら、律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。

救いとの関係を明かにすることでもあります。

律法とは「罪の意識が生じる」ためのものです。つまり律法に従いきれなかったユダヤ人がそうです。また現代人も同じです。そのユダヤ人の歴史を知って、自らを考えてみると、同じように自分の罪が明らかになるからです。

私たちもモーセの律法を旧約聖書で読むとき、自分の罪が明らかになります。または、「心に記された律法」とパウロが言うところの良心に照らされるとき、自分の罪や心の汚さを感じずにはいられないでしょう。

主のきよさや自分自身の良心と、真剣に誠実に向き合いましょう。そこから主は何を語られるのでしょうか。主の十字架の赦しを確信とともに感謝しましょう。そして主の御心に対して、希望と安心を持って従いましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

ここに来てパウロはユダヤ人に律法が与えられたことの意味を明確にします。それは旧約と十字架の

